



イペアンロー! (いただきます)

今日は「ムシ」をごしょうかいします。お祭りなどの特別な日につくる、樺太(サハリン) でよく食べられていたデザートです。

ツルコケモモ、ハスカップ、ハイマツの実などのベリー類と、クリやユリ根などを入れてつくります。

ぷりぷりしておいしいゼリーをつくる時、寒天やゼラチンのほかに、何を使うことができるでしょう? じつは、魚の皮や肉などをにつめて、ぷりぷり感を出すことができるのです!

魚や肉のものをつかった翌日、にじるがゼリーのように固まっていることがあります。それが「にこごり」で、和食でもこの調理法は使われています。



カンピナ(本)

あるコタン(村)で、4世代が寄りそって暮らすある家族の様子を、季節のうつりかわりとともにえがいたお話です。かりの様子、日常の仕事、子どもの誕生(お産の様子)、結婚式やお葬式。「昔のアイヌの暮らしってどんなふうだったの?」という問いに、わかりやすく答えてくれます。巻末にたくさんの「参考文献・資料」がのっています。それは、作者がこれらの本を読んで得た知識が、このマンガにつまっている、ということです。ですから、このマンガの「コマ」コマに出てくる暮らしの道具や着物、食べ物などは細部までいねいにえがかれ、生活の中でよく使う簡単なアイヌ語も、たくさん出てきます。

最初と最後の章では、現代のアイヌが

「ムシ」(ゼリー)

魚の皮につめてぷりぷり感

サケを使ったムシの場合、新鮮な生サケの皮をよく洗い、細かく切ってにつめます。私は生サケの切り身を買ってきて、ムシをつくったことがあります。少しの量の皮でも、たしかにムニッと固まりました。

最後にほんのリサケのかおり。もう少し修業が必要だと感じる味でしたが、ゼラチンで固めてつくるより、不思議なコクがありました。

今回は手軽にできるゼラチンを使ってムシをつくります。

ムシ(ゼリー)

◇材料(つくりやすい分量)

ベリー類(イチゴ、ブルーベリー、ラズベリー、クランベリーなど) 合わせて100g

クリ(パックのむきグリ) 50g

水 250cc

ゼラチン 5g

砂糖 50g

◇作り方

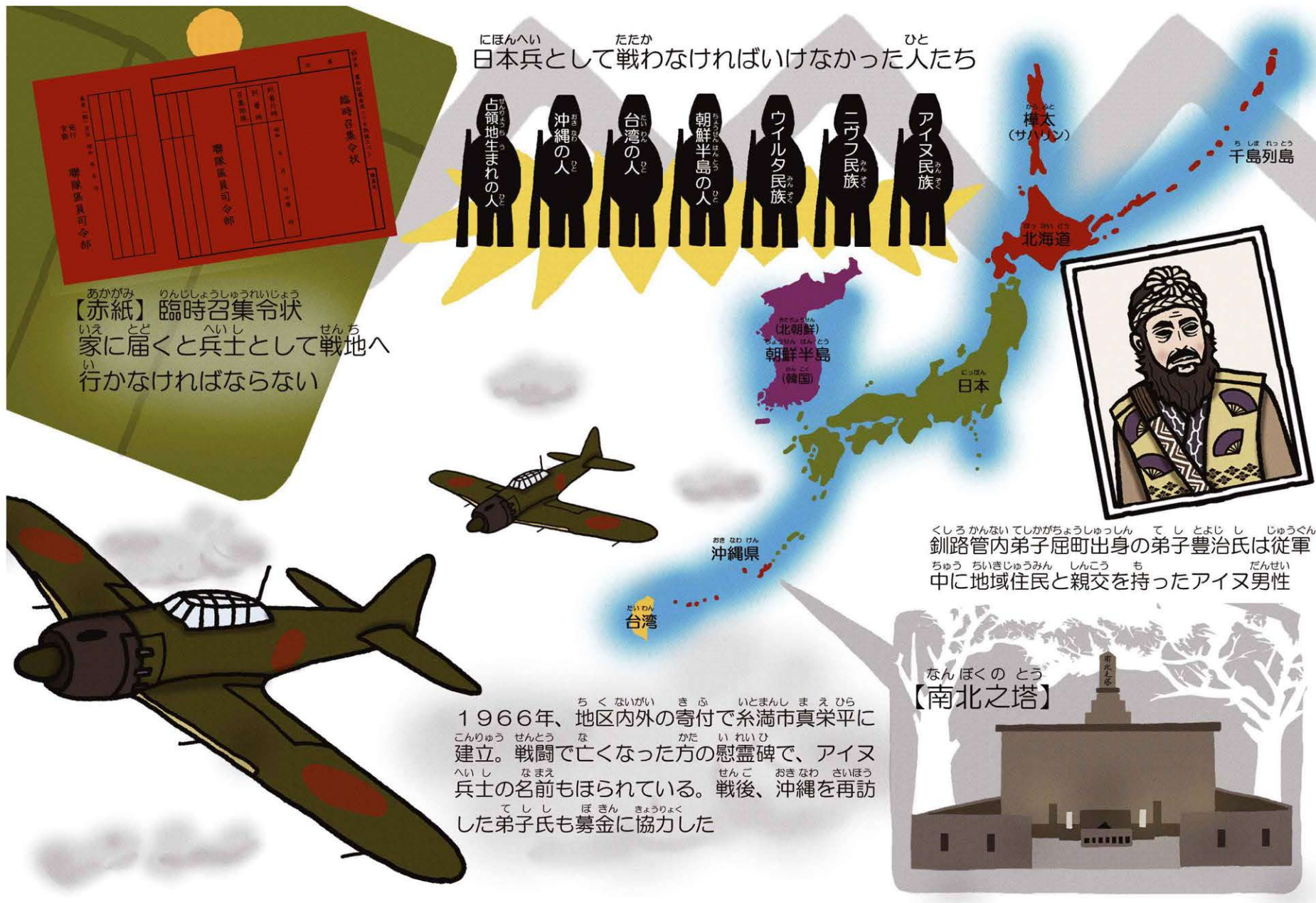
- ① ゼラチンは大さじ3ほどの水でふやかしておく。
- ② なべに水、ベリー類、砂糖を入れ、実をつぶしながら、砂糖がとけるまでになる。
- ③ ②にクリとゼラチンを入れて、よくまぜる。あら熱がとれたら容器に入れ、冷蔵庫で冷やしてできあがり! ベリー類は、冷凍のミックスベリーが使いやすい。

アコロコタン

成田英敏・著

えがかれています。30年以上にわたってアイヌ語を学んできた和人の作者が、自分の立場からアイヌを見つめ、ともに考えてきたことが伝わってきます。

(2019年、双葉社、1320円)



「フムフム」はアイヌ語でのあいづち

8月、15日の「終戦の日」を中心に戦争の話題がつかれます。多くの人をぎせいにした戦争をくり返さないために、戦争で何があったかを伝えていきます。しかし、その戦争は「半分しか伝えられていない」とも言われます。

戦争で亡くなった「日本兵」には、アイヌ民族や沖縄の人のほか(今の国や地域の名前でいうと)台湾、韓国や北朝鮮の人もありました。明治時代に入ってから順に日本の植民地になり、日本と同じ考えを持つように強制されたのです。

樺太(サハリン)に暮らしてきたニヴフ民族やウイльта民族も日本人ではありませんが、日本語を強制され、戦争に協力させられました。日本が占領した国で、日本人との間に生まれた人も戦地に送られました。

武器の材料や食べ物がないため、人々は家じゅうの金属をさし出し、畑仕事をしました。スパイ活動や戦闘も求められ、子どもまで参加させられることもありました。

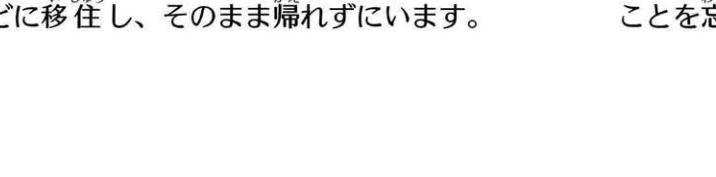
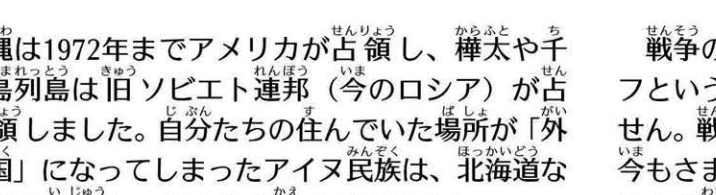
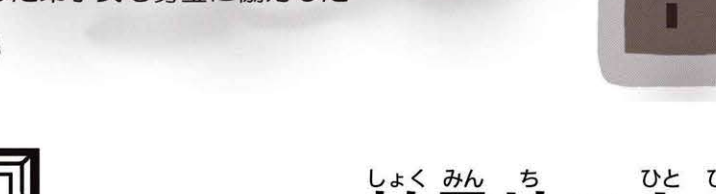
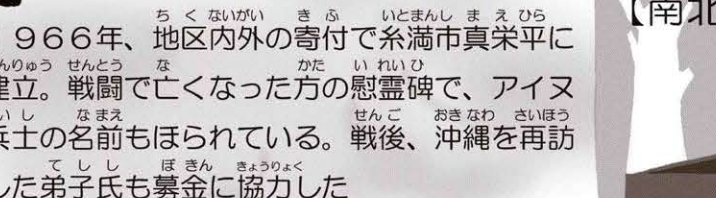
樺太や沖縄では、和人と言葉がちがうためにスパイだといわれて殺された人や、自殺した人もいました。中国や東南アジアでは戦闘にまきこんではいけぬ民間人がぎせいに、その数は2千万人をこえるという研究もあります。

1945年(昭和20年)に日本が戦争に負けたことで、日本による占領は終わりました。沖

日本兵として戦わなければいけなかった人たち



1966年、地区内外の寄付で糸満市真栄平に建立。戦闘で亡くなった方の慰霊碑で、アイヌ兵士の名前もほられている。戦後、沖縄を再訪した弟子氏も募金に協力した



「フムフム」はアイヌ語でのあいづち

8月、15日の「終戦の日」を中心に戦争の話題がつかれます。多くの人をぎせいにした戦争をくり返さないために、戦争で何があったかを伝えていきます。しかし、その戦争は「半分しか伝えられていない」とも言われます。

戦争で亡くなった「日本兵」には、アイヌ民族や沖縄の人のほか(今の国や地域の名前でいうと)台湾、韓国や北朝鮮の人もありました。明治時代に入ってから順に日本の植民地になり、日本と同じ考えを持つように強制されたのです。

樺太(サハリン)に暮らしてきたニヴフ民族やウイльта民族も日本人ではありませんが、日本語を強制され、戦争に協力させられました。日本が占領した国で、日本人との間に生まれた人も戦地に送られました。

武器の材料や食べ物がないため、人々は家じゅうの金属をさし出し、畑仕事をしました。スパイ活動や戦闘も求められ、子どもまで参加させられることもありました。

樺太や沖縄では、和人と言葉がちがうためにスパイだといわれて殺された人や、自殺した人もいました。中国や東南アジアでは戦闘にまきこんではいけぬ民間人がぎせいに、その数は2千万人をこえるという研究もあります。

1945年(昭和20年)に日本が戦争に負けたことで、日本による占領は終わりました。沖



きょうの目とば

植民地

国はときどき広さが変わり、ある国が国民ごと別の国に取りこまれることがあります。

話を分かりやすくするために、国を会社、国民を社員にたとえてみましょう。社員の数、言葉や考え方は会社ごとにちがいます。他の会社と合併すると、会社は大きくなりますが、小さいままで十分だと考える会社もあります。ところが、大きな会社が無理に小さい会社を取りこみ、自分たちの言葉や考えをおしつけ、相手のビルや工場を取ってしまったらどうでしょう。

歴史では大きい国が軍隊の力によって、無理やり他の国を取りこみ、土地を取り、住人を働かせることが世界各地でおきました。この取りこんだ国や地域を植民地と言います。

補償金

日本は1952年に法律を作り、戦争でけがをしたり、亡くなりたりした軍人の遺族にお金がわたされることになりました。一方、台湾や朝鮮半島の人々、ウイльта民族やニヴフ民族などは日本国籍ではないことを理由に、この法律によって守られませんでした。「日本人」として戦争を手伝わなければならなかったのに、植民地だった地域の人々はとても不利な立場におかれまして。

その後、1987~88年に台湾、2000年には朝鮮半島の人々に補償をするための法律が作られました。しかし、敗戦から法律ができるまでに何十年もたった上、支払われる金額も和人の30分の1しかない場合があるなど、じゅうぶんな内容ではありませんでした。

植民地の人々も召集

「日本兵」として戦争強制

アイヌ民族は日本の風習を強制され戦争にも協力



縄は1972年までアメリカが占領し、樺太や千島列島は旧ソビエト連邦(今のロシア)が占領しました。自分たちの住んでいた場所が「外国」になってしまったアイヌ民族は、北海道などに移住し、そのまま帰れずにいます。

戦争のニュースで、アイヌやウイльта、ニヴフという民族の名が出ることはほとんどありません。戦争は多くの命をうばっただけでなく、今もさまざまな民族がいきょうを受けていることを忘れずにいたいと思います。